

19世紀英国の近代化と狂気

—— ルイス・キャロルの身体医文化論 ——

平 倫 子

目 次

1. 序
2. 社会史的, 医学史的背景
3. オックスフォードの Lunatic Asylum
4. キャロルと写真
5. キャロル作品を読みなおす
6. 結

1. 序

このテーマの発端はごく小さな疑問から始まっている。

ルイス・キャロル (Charles Lutwidge Dodgson, 1832-98) が1862年ボート遊びで語った *Alice's Adventures under Ground* (1862) に狂気は描かれていないのに、その後出版された *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) に新たに加えられた6章 (Pig and Pepper) と7章 (A Mad Tea-Party) が狂気と密接に結びついているのはなぜか。さらに晩年の長編『シルヴィーとブルーノ』(正編1889年, 続編1893年) の, 続編で特に顕著になる狂気や精神病院の話題の多用の根拠はなにか。それらを裏付けている時代の心性とはどのようなものだったのか。

これを読み解くためには「狂気の社会史」を知る必要があると考え「19世紀英国の近代化と狂気」をテーマに取り組み始めた。

ちょうど2002年に日本英文学会が北星学園

大学で開催され、『身体医文化論へのいざない』——医学・生物学・認知科学——英文学者に何ができるのか』と題するシンポジウムがあった。パネラーは身体医研究会のメンバーで、その成果を『身体医文化論』という著書にまとめたばかりであった。歴史の諸相が身体をどう照らしてきたかを各ジャンルが概観し、それぞれの専門分野がそれぞれの文化史を読み直し、合わせ鏡のようにして展開させる, という興味ある研究方法を提案した本で、ルイス・キャロルの身体論を考える上で多くの示唆を与えてくれた。

シンポジウムは17世紀から20世紀までの英国を中心に身体感覚, 身体欲望をとらえなおす歴史学, 英文学の領域横断研究のすすめであったが, なかでも医療の臨床における医者, 患者, 家族の関係を従来とは異なる視点でとらえた医学史研究家の鈴木晃仁氏の「物語の装置としてのカルテ」という発題にひかれた。氏はイギリスの歴史学者ロイ・ポーター (Roy Porter, 1946-2002) の最晩年に彼のもとで学び, その成果を新歴史学の立場から提言を行った。

2003年4月から半年, 英国研修の機会を得た筆者は, 1996年『失恋ゆえの狂気——医学, 小説, 狂乱する女』(*Love's Madness, Medicine, the Novel, and Female Insanity, 1800-1865*) を著したオックスフォードのペンブルック・カレッジのフェロー, Helen Small氏と慶応大学の鈴木晃仁教授に示唆をあおぎ, 表題の研

キーワード: 狂気, ルナティック・アサイラム, 医学写真

究テーマを、オックスフォードではクライスト・チャーチ・カレッジ・ライブラリー、ボドリアン・ライブラリー、オックスフォードシャー・ヘルス・アーカイヴ（ウォンフォード・ホスピタル・アーカイヴ）を拠点に、ロンドンではウエルカム・インスティテュート・ライブラリー、ブリティッシュ・ライブラリー、ロンドン近郊のサリー・ヒストリー・センターなどを中心に、かくれた歴史の一面である「狂気の社会史」の検証を、できるかぎり古文書や一次資料にあたることに努めて調査した。

この経験は、筆者にとってずっと通過点でしかなかったオックスフォードが、そこを基点にキャロルの関連の土地を訪れ、ふたたび戻る帰着点にもなったことで、キャロルゆかりの地の現場に立つことが、これまでとは異なる地平でものをみる体験を可能にしてくれた。本論はその調査研究をまとめたものである。

2. 社会史的、医学史的背景

そもそもノブリス・オブリージェの精神から発した教区単位の慈善事業に基づくものであった貧民救済は、1601年貧民法（Old Poor Law）となって形をとどめたが、時代の権力と法律の波にもまれ、あつてなきがごときものになっていた。

救貧院（workhouse）は本来、貧しい病人や高齢者や子どもを収容し、彼らの仕事を補佐することが目的であったが、収容者は次第に怠惰になり、救済されることが目的になってゆき、あらゆる種類の貧民、犯罪者、狂人、病人などの収容施設としての性格を強めていった。

したがってときに感化院や矯正院（house of correction）、監獄（gaol）、病院（hospital）などさまざまに呼ばれた。収容されてもほとんど手当てもほどこされず死を待つばかりの

状態で、死ねば解剖材料に廻されることも多かったという。

17世紀のロンドンの workhouse の歴史は貧民救済事業の目的と機能をもった hospital の歴史と重なる。ロンドンのセント・トマス病院、セント・バーソロミュー病院、セント・クライスツ病院、ブライドウェル病院、ベツレム（ベドラム）病院の5つの病院は当初、貧民収容所として設立されたものであった。

当時増え続けていた浮浪者は犯罪や暴動をおこしやすく、そうした政府の權威にあらがう反社会的な行動をとるものを収容（監禁）する場が hospital であった。たとえどれほど人権を無視しようとして、政府公認というかくれみのを着た場所になり、当然そこでは権力によって狂人に仕立て上げられる例も多かった。⁽¹⁾

つまり伝統的には貧民のためのホスピタリティー（おもてなし）の場であったものが、しだいに病気の貧民の世話と治療の場になっていったのが hospital である。18世紀ロンドンでは大病院の設立があいついだ。1720年のウエストミンスター病院、1724年のガイ病院、1733年のセント・ジョージ病院、1740年のロンドン病院、1745年のミドルセックス病院、1751年のセント・ルークス病院などである。捨て子養育院、産科医院、性病患者留置病院など専門病院や診療所も数多く作られた。

18世紀の救貧院や感化院の様子は、ホガースが当時の世相を諷刺して作成した連作版画のひとつ「娼婦一代記」（*A Harlot's Progress*, 1732）の4枚目（全六枚）のモル・ハッカバウトの絵に象徴的に描かれている。ヨークから憧れのロンドンに出てきたモルは、金持ちのパトロンに囲われることになり、飾りたてた家をあてがわれる。やがて恋人ができ、不義の現場がパトロンに見つかりモルは追い出される。スラム街で娼婦生活を始めたモルは客から盗んだ時計をみせびらかしたりしているが、娼婦狩りの刑事に逮捕され感化院に収

容される。娼婦や売春宿主、賭博師らと朝6時から12時間大麻をたたく強制労働を課せられる。壁際にそれを怠けた女が「ここに立つより働くほうがまし」と書かれた手かせ板に手をはさまれ、見せしめのために立たされている。仕事場には怠惰計のむち打ち柱や、絞首台も見える。華やかな衣装のモルの脇には鞭を手にした獄吏がいて厳しい顔つきで仕事を監視している。

悪法だった旧貧民法の改定の指揮をとったのがナソー・シニア (Nassau W. Senior, 1790-1864) とエドウィン・チャドウィック (Edwin Chadwick, 1800-90) らで、彼らは綿密な実態調査を行い、その結果救済の限度を、救済にたよらない最下層労働者の生活水準以下に設定することを決め、従来の教区単位の運営を改めて中央委員会を設置、全国一律の運営にするよう提言した。これをもとに救貧法中央委員会が発足、チャドウィックを総局長に新法案を提出、1834年に新救貧法が議会を通過した。これにより救貧院は年一度の監査をうけ、厳正な会計報告が義務付けられ、基準に満たないものは認可が取り消されるようになった。

『身体医文化論』序章によれば、ヴィクトリア朝 (1837-1901) は「神経の時代」であるという。それまでは特定の階級に限定されてきた神経の病はあらゆる階層にひろがり、いたるところにヒステリーの女 (生殖機能につかうべきエネルギーを精神機能に使いすぎた女性)、神経衰弱の男 (産業社会における仕事のプレッシャーや文明社会の速度に神経をすりへらした男性)、早熟な性にふける神経症の子ども (早熟な性経験が子どもの神経組織の発達をおくらせ神経症予備軍になる)、神経組織の成長が止まった人などが社会のいたるところに見られるようになり、それらの症状は1880年代になってジョージ・ビ Beard (George Miller Beard, 1839-83) により「神経衰弱症」と名づけられ、文明病とみなされるようになってゆく。⁽⁹⁾

Lunatic Asylum (精神病院、以下英語表記) の歴史を概観すると、1774年 The Madhouse Act 以後、private なものは政府の法律にしたがって許可をもらい、毎年その手続きを更新しなければならなくなった。そのような施設はたとえ入れても、過酷な取り扱いを受けることが多かった。

1808年、それまで private にもっぱら営業目的で営まれていた lunatic asylum あるいは madhouse に公的基金が投入されることを認める法律が議会を通過した。

1828年には The Madhouse Act が改正、強化され、ロンドンに Metropolitan Commissioners in Lunacy (首都圏精神病院監察庁) が創設された。それが1842年の Lunatic Asylum Acts で監察対象がひろがり、1845年の Lunatic Acts により名称が The Commissioners in Lunacy となって全国的なものになる。監察官は医者と法律家の12名で構成される任命制で、本庁をロンドンにおいていた。その任務は各地の精神病院の施設の監察、不法経営の摘発と処罰、許可証の更新の可否の決定などの権限を担っていた。あとで述べるキャロルの叔父 R.W.S. Lutwidge の職業はこれである。

1845年に public の County Asylum の設置が義務付けられるまでは、asylum のために税金を使うのは無駄遣いとする考えが強く、asylum に入れるのは金持ちあるいは後見人つき、または保証があることが必要だった。そうでないものは、workhouse (救貧院) や bridewell (矯正院)、あるいは gaol (監獄) に収容された。法律施行後1850年になってもなお、狂人の半数以上が private に運営されていた施設に収容され、高い費用を強いられていた。

18世紀以前狂気は、精神の錯乱 (悪魔つき) か、一種の獣性退行とみられ、狂人を収容する施設はロンドンのベツレム (ベドラム) 病院のみであった。医師モンロー一族のワンマン経営で、1845年以降も Commissioners in

Lunacy の監査をまぬがれていた。そのころは機械的拘束、肉体的懲罰、瀉血や催吐剤の大量投与といった伝統的な治療法がおこなわれ、見学者に公開されていた。しかし18世紀後期になると進歩的な医者は狂気は心の病であり、治療により治癒すると考えるようになった。適正な環境、できれば田園環境の保養施設に収容するのが望ましいとされ private madhouse が、入院費用をはらう余裕のある人々のために設立された。教区が貧乏な患者の費用を払うこともあった。19世紀初期になると拘束や暴行による治療はあたらしいモラルセラピー(精神療法)に変わっていった。その療法は人道的親切といわれた。しかしそのために施設は閉じ込めるための場として悪用されることにもなった。ミシェル・フーコーが「大監禁」と呼び、その背後にあった療法悪用の陰謀を強調した所以である⁽⁵⁾。

ポーターは、いかにしてある人が狂っているとみなされるようになったかを考えたとき、狂人の思想や行動があまりに知られていないことに気づき、それは証拠がないからではなく、証拠が無視されたか、あるいは医師および専門家の目だけを通して見られたためであると考へ、狂人の残した自伝を詳しく調べ、下からの声に耳を傾ける作業を行った。そして同時代人の思想、価値観、願望、希望、不安がそこに忠実に反映されていることを明らかにした。

3. オックスフォードの Lunatic Asylum

ここでオックスフォードの動態をみておこう。1821年の国勢調査から1871年の調査までの50年でオックスフォードの人口は16,446人から31,404人へ約2倍に増えた。大学人口は1861年には市全体の人口の5～6パーセントであった。市民は裕福な市民、銀行家、醸造者、法律家、洋服屋などエリートのほか、小

規模の商人、職人、サービス業、大学使用人などの労働者階級、そして貧民層などであった。市の人口の3分の2が St. Thomas, St. Ebbes, St. Mary Magdalen, St. Clements, St. Aldates など市内でもっとも貧しい5つの教区に集中していた。

1844年のおもな商人の数を示す次のよう記録がある。

石工	72
仕立屋	69
パン屋	56
塗装工, 配管工, ガラス職人	39
石炭商	37
食料雑貨商, 茶商	29
大工, 表具師	23
馬車屋	22
弁護士	22

(Oxfordshire Local History, p.12)

1851年の国勢調査では8145人の男性の雇業者のうち863人が建築業、485人が仕立屋、472人が靴屋で、全体の27%が家内工業か同業組合に属していた。女性の雇業者は4600人で家事奉公人が多かった。

オックスフォード市は道路拡張、橋の設営、スラム街の撤去を積極的にを行い、1841年スラム街の跡地にアシュモリアン・ミュージアムと隣のテイラリアン・インスティテューションが、63年には道路をはさんでヴィクトリアン・ゴシック様式のランドルフ・ホテルが建った。55年からはベリオル、エクセター、キーブルなどのカレッジやユニヴァーシティ・ミュージアムが建てられた。労働者階級の家は St. Ebbes 地区や St. Clements 地区、Jericho 地区に建設された。Gloucester Green は1601年から週一回の牛の取引のオープン・マーケットの場所であったが、1789年、市の監獄が建ち、1842年には監獄に面して労働者階級の家が建てられ、職人、芸術家、仕立屋、靴屋、婦人服屋、家庭や大学の使用人などが住んだ。80年代になると私立の寄宿学校二校と市立学校

が建てられた。

19世紀初頭、市の行政は公衆衛生に無関心ではいられなかったが、管理組織は旧態でことを重大に受け止められずにいた。1835年市議会は Corporation Act（自治体法、非国教徒を排除するために、地方自治体の官吏に忠誠と国教信奉の宣誓をさせる条例）の採択を決めたが、法定組織と大学の勢力のもとにあって権限は限られたものであった。一方市当局は水道事業者と不明朗な結託をしていた。

救貧区の救助法施行委員（The Guardian）は1840年まで個々の貧民の健康と福祉の責任、種痘の接種の責任をになっていたにもかかわらず、権限は1871年まで保留にされていた。道路舗装推進委員会（The Paving Commission）は、下水溝設備委員会（Commission of Sewers）の責任も負担し、1850年までにはオックスフォードにおけるもっとも重要な地方自治組織になっていた。それは1864年地方保健評議委員会（Local Board of Health）に引き継がれるまで、道路管理、清掃、街の改善、ごみ、下水道の設備の責任を負っていた。

大学は Paving Commission と市議会に多数の代表を送っていたが、各大学の学生の保健衛生はそれぞれの大学が責任を負っていた。1832年から47年までの Paving Comm. の議事録はその任務を、道路舗装、清掃、街灯、橋の改築（フォーリー・ブリッジは1833-4年に改築）などであることを記している。

1849年 St. Giles 地区にマートーズ・メモリアル（殉教者の記念碑）の建設計画がとりざたされていたころ、道路を舗装すると夜の排泄物の捨て場をふさいでしまうので舗装反対の苦情があった（汚物を下水渠に棄て、水で流すことは条例で認められていた）。Paving Comm. には上水道の管理権はなかったため、市議会にこの条例を取り下げるよう申請し、かわりに夜間の屎尿運搬のための車を購入した。

1830年代から40年代にかけて公衆衛生の関心は一段と高まった。新救貧法に貢献したチャドウィックは1842年、*Report on the Sanitary Condition of the Labouring Population of Great Britain* を出版した。それは44年および45年の二度にわたり議会で報告され、やがて Royal Commission on the Health of Town の企画につながった。これを受けて死亡率の高い都市の調査が行われた。オックスフォード市はその調査対象には含まれていなかったが、同市は下水管、ガス管、上水道の状況を示す一覧表を作成し査察官に訴えた。しかし結果は何も生み出さなかった。

モーペス卿（Lord Morpeth）は1847年、衛生問題と保健医に関する Health of Town Bill（HTB、都市衛生法案、すなわち都市は衛生局を設置しなければならない、という条文を盛りこんだ）法案の発起人になった。これは強制力は無く任意のものであったが、オックスフォード市議会は1848年新法案（New Bill）に賛成し請願書をロンドンに送った。しかし市議会と Paving Comm. のあいだで意見が一致しなかった。そこで Paving Comm. は、HTB はオックスフォードでは Corporation Act（自治体法）によってではなく、現在の舗装法を施行する機構がたずさわらざるべきであると主張した。市議会はもしそうなら Paving Comm. は強力な組織になるから、市議会は大学と手を組んで法案に力を貸してもらわなければならないという見解を示した。

オックスフォードでは1832年、1849年、につづき1854年にもコレラの大流行があった。その年英国を襲ったコレラは秋になってオックスフォードをも巻き込んだ。この年は英国がクリミア戦争に参戦した年で、夏のあいだ海外遠征隊は、戦地スキタリやヴァーナのように命を落としたものが多かったという。1849年にコレラが流行したとき、オックスフォード市は、下水の不備、不潔に注目し、他の医師とともに Paving Comm. のメンバーであっ

た Dr. Acland (Sir Henry Wentworth Acland, 1815-1900, オックスフォード大学の Lee's Reader in Anatomy でのちに医学部欽定教授, Regius Professor of Medicine in the University of Oxford になり, クライスト・チャーチ・カレッジのリデル学寮長と親しく, 彼の侍医でもあった) の指導の下で市の全面的な衛生調査を要求した。51年調査が行われたにもかかわらず, 改善につながらなかったため54年, 6年前の Public Health Act を採用しようという試みがなされたが, 法律の有効性をすでに失っていることに気がつき, 有効期限延長を提出した。地方独自の法案を推進することが討議されたが, 副大法官 (Vice Chancellor) や市長はさきの New Bill の採用を主張し, 対立した。

オックスフォードは海拔が低く, 井戸と汚水溜めが近く, 学生が泳いだりボートを漕いだりするアイシス (テムズ), チャーウエル両川ともに汚染がひどく, テムズ・バレー地区はとくに汚水の排出路の改善が遅れており, 貧民層にコレラの被害が多かった。他の都市と比較してもオックスフォード市の汚染はひどく, 調査の結果, 衛生管理法の施行の遅れが指摘された。改善の遅れは貧民救済法施行委員と市の対立が尾を引いていることにあった。

1854年8月6日, オックスフォードにコレラの最初の患者が発生, 公衆衛生局 (Board of Health) は3週間後の9月2日になってはじめて委員会を開いたが, そのときアクランドは助言医師に選ばれてはおらず, 6日になって選ばれたときには28人の罹患者のうち11人が死亡していた。完全な隔離ができず, 収容小屋と診察テントが並んで設置され, 屋外便所が共用されたため相互感染が起こった。貧民救済法施行委員の仕事はあまりに官僚的だったので, アクランドは workhouse に食料, 食器, 世話人の支援を頼むと同時に彼はまた, 熟練した看護婦の必要をとえ, 主婦らボラ

ンティアによる援助を要請した。

当時コレラの原因は一般に, 接触感染か沼沢地から発生する毒気 (miasma) であると考えられていたが, 後者の意見が有力であった。

アクランド博士はこの年『1854年オックスフォードのコレラの記録』(Memoir on the Cholera at Oxford in the Year 1854, with Considerations suggested by the Epidemic) を書いて⁽⁴⁾いる。

自治都市オックスフォードの公衆衛生総局 (Public Health Service, PHS) は, 1872年に法律が制定されるまで, 市当局の環境局や伝染病対策機関が機能していなかった。委員のなかの医者が改善を主張しても, 商人, 大学教授, 教区代表などの勢力に押され, 保健衛生の対策の遅れをどうすることもできず, 1872年になってようやく衛生総局の活動が本格的に始動した。

オックスフォードの Lunatic Asylum の歴史をみるまえに, private madhouse の先駆的な研究である Parry-Jones の *The Trade in Lunacy* によってその変遷, 特徴, 役割をみてみることにする。

private madhouse (私立の精神病院, 以下英語表記) は狂気の人々を収容し世話をするための私立の施設であるが, 経営者の金儲けのための商売でもあった。イングランドとウエールズでは17世紀初期から今に至るまで400年近い歴史を持つ。house for lunatics, madhouses, private madhouses, private licensed houses, private asylums, mental nursing homes などさまざまに呼ばれており, 単に madhouses とよばれることが多かった。

長い歴史をもつ madhouse の変遷の過程は次の三つの段階を経てきた。

1) 17世紀中葉の place of confinement (閉じ込めの場所) ともいわれた発祥から1775年までの時期。この時期は private madhouse のしくみが出来た時期であるが実情が記録

されていない。

- 2) 1775年から1850年までの時期。private madhouse のシステム確立の最盛期で、private licensed madhouse がもっとも重要な役割をはたした時期である。この時期には private madhouse の数が飛躍的に増加した。19世紀初頭20だった地方の madhouse の数が1844年には100に増加し、このピークはほぼ5年間続いた。

このような private madhouse の急激な増加は、経済と社会の仕組みが18世紀末から19世紀初頭にかけて大きく変化したために、イングランドとウエールズで狂気の貧民層 (pauper lunatics) が増加し、それにともなって病院での治療を必要とする狂気の貧民 (insane poor) が増えたためである。

この事態に対処するために insane poor の世話は公共機関が責任を持つべきだとする声があがる。やがて1845年に Lunatic Act が制定され、county (州) と borough (自治都市) に public asylum が設立され、insane poor はそこに移った。これによって private madhouse の役割は減少し、第三の時期が始まる。

- 3) private madhouse のシステムが衰退して public asylum が徐々に浸透してゆく時期。この時期の private madhouse は、中流および上流階級の患者と、比較的貧しいが料金を支払うことができる人々のためのものとなる。

Lunatic Act は制定されたが county asylum など public (公立) の施設は、19世紀前半にはなかなか建設されなかったばかりか、世紀の後半になっても上流と中流階級の要求にこたえるのがやつの状態だった。そういう理由で private licensed houses は pauper lunatics (貧民層の精神病患者) のために19世紀の終りまで存続する理由があったのである。公立の county asylum 設立の制度が導入され、いったんは廃業した

licensed houses がこの時期ふたたび開業する例も多く、こういう場合の private licensed madhouse の貢献も見逃しにはできないものがあった。

18世紀末と19世紀初頭にかけて、それまで多かった医者ではない (non-medical) 経営者にかわって医者が経営者になる場合がすこしずつ増えた。その結果 madhouse の経営者は専門職を身につけた社会的地位の高い人という評価を得るようになり、‘trade in lunacy’ は威信のあるものとみなされ始めた。

19世紀後半になると、地方の private licensed madhouse のほぼ3分の2が医者による経営になる。そうした経営者の中には公立病院や州立の精神病院 (county asylum) の著名な内科医や病院長なども含まれていた。しかし専門の医師ではない人が private madhouse の経営をする場合、前任の医師の経営者の未亡人や娘など、しろうとが経営する例も多く、また ‘trade’ 中心で利益追求に走り、患者の治療を怠る悪徳業者やにせ医者なども多くみられた。

madhouse の歴史は告発と閉鎖のそれでもあり、システムが暴かれれば暴かれるほど偏見は大きくなるばかりであった。しかし全体的にみて madhouse の経営には多額の費用がかかり、経営者の世間的な信用にともなって医師による経営は人情味あふれた慈善的な態度を患者に示す場合のほうが多くなってゆく。

Parry-Jones は18世紀後期から19世紀初期にかけての private madhouse の役割が、医学史、精神医学史から見落とされてきたことに注目し、オックスフォードシャーの private licensed houses の Hook Norton (1725-1854) と Witney (1823-57) の二つにしぼって1775年から1857年までを、四季裁判所 (Court of Quarter Session) の記録、療法の記録、議会議事録など多くの資料を駆使して考察した。

この二つの private madhouse は特別高い評価を得ていたわけではないが、地方の

licensed houses を代表するものと考えられてきた。Witney の施設は小規模で主に近隣に住む女性の患者が圧倒的に多かった。Hook Norton の施設は18世紀初期に設立された madhouse の典型のようなもので、規模も小さく患者も地元の人々であった。1840年代に入ってから拡張され、増加の著しかった近隣の州からも pauper lunatics を収容するようになった。

Witney と Hook Norton の二つの licensed houses の経営者はどちらもその地区の著名な医者専門職を身に付けていた家族の出身者で、それぞれ良心的な誠意ある経営をした。環境、設備ともに満足のいくもので、非難されるような欠陥はなかった。Witney では前院長で経営者の未亡人が施設を管理していた1853年から55年のあいだに、患者の身体にゆきすぎた物理的な拘束が加えられたという記録があるが、付添い人や他の患者への安全が脅かされるような患者の暴力的行為があった場合には、物理的拘束という手段の使用が政務監察官 (Visiting Magistrates) や精神病院監察官 (Commissioners in Lunacy) により容認されていた。

1828年から1857年までのあいだ、これら二つの Oxfordshire private licensed houses の入院と退院の記録によると、この期間二つの施設の604人の患者に関し、延べ745回の入院者数があるが、とくに私費で入院した患者では短期入院の割合が高いのにたいし、貧困者の入院期間はどの患者も長い、ということがわかる。このことから私費入院の患者を不当に長く入院させ経営者が利益を増やそうと意図した、という世間一般にいわれた非難はあたらぬ、といえる。

Hook Norton では入院患者の4分の1近くが全治し、4分の1強の患者が半治癒であった。Witney では3分の1強の患者が全治、4分の1強が半治癒である。両病院に関するその数値は同じ頃の他の private licensed

houses の平均値とほぼ一致している。

入院した患者全体の4分の3以上にのぼる貧困者層の患者の治癒したものの割合は、上記の調査の時期に Hook Norton に入院した私費の患者の場合よりも低く、回復しない人々のほとんどは貧困層であった。貧困層を受け入れたために、Hook Norton での死亡率は Witney の場合よりもずっと高かったがそれは、貧困者は入院の時点で病状が悪化している場合が多かったからである。そのおもな理由は、教区が受持つ入院費用を節約するために、病状が悪化、慢性化してから初めて入院させるという処置をしたからであった。

入院患者の心的障害の有無の判定は、興奮状態、暴力行為、言語錯乱、妄想、など単独のもの、あるいはそれらの合併症などがあげられるが、もっとも一般的なものはメランコリア (melancholia) であった。

二つの病院で行われていた治療の方法は、その時期の地方の private licensed madhouses での治療の典型を示していた。19世紀初期には地方の private licensed madhouses の多くは、身体拘束という治療方法がとられたが The York Retreat のような進歩した病院での治療の基本は、モラル・マネジメントあるいはモラル・セラピーと呼ばれる新しいものもあった。

オックスフォードの public 資金による asylum は1826年にオープンした Oxford Lunatic Asylum と、1846年に開業の County Asylum at Oxford である。前者は (現在 Warneford Hospital)、公的資金、カレッジからの支援、市の補助、オックスフォード在住の著名人の寄付などをあわせた財源による独立施設として1826年 Oxfordshire と Berkshire の二つの County の pauper lunatic asylum として Headington に開設された。受け入れ対象は上、中流階級の人々、poverty よりは上だが裕福でない人々、poor だが pauper ではない人々、万一のときの救済見込みはあるが不

幸の重荷に耐えられない人々などであった。1843年に後援者で巨額の私財を投じた Samuel Wilson Warnford (1763-1855) の名を冠し Wornford Hospital と呼ばれるようになった。(63年6月21日のキャロルの日記では Oxford Lunatic Asylum となっている。)

後者は1845年制定の Lunatic Act を受けて州税により1846年に Littlemore County Asylum として Littlemore に開設された。Oxford 市と Berkshire 州, Abingdon, Reading, Windsor の自治町村からの患者を受け入れた。Warnford Hospital は中流階級のための private hospital で事実上 Littlemore County Asylum と競合することはなかったが、1856年両者は緊張状態になり論争が公にされた。Littlemore County Asylum の院長 William Ley が Warnford Hospital の経営委員になることを Warnford の経営委員長の Vaughan Thomas が反対したため、Ley が Warnford 病院の経理不正をあげたことにはじまる論争である。

4. キャロルと写真

ルイス・キャロルが1855年から60年代をとうして特に強い関心をもったものに写真と身体医文化がある。現存する彼の日記は1855年(23歳)初めからで、それ以前の詳細ははっきりしないが、変貌する英国は、医学史的観点から見ても大きな転換期にあった。オックスフォード大学という恵まれた環境にあったキャロルにとっても国家、社会の動きには敏感にならざるをえなかった。

キャロルの周辺でもクリミヤの戦地に赴くものがあり、戦争という重大事は国家を強く意識させるものであった。1855年に出版された桂冠詩人アルフレッド・テニソンの詩集『モード』(*Maud and Other Poems*) のなかの「軽騎隊進撃」(*The Charge of the Light Brigade*) はクリミヤ戦争を詠んだ詩で、よく人々の口に上った詩であったが、キャロル

はその詩のなかのテニソンの語法について細かく日記や手紙にしたためている。

大学で数学を専攻し卒業後も数学教師として大学に残ったキャロルは、科学者の鋭い目をもっていた。1851年ロンドンで開催された第一回世界万国博覧会を訪れた彼は、なによりも新鋭の光学機器に魅せられたようだ。ロンドンに住む母方の叔父、法廷弁護士(barrister) で1845年から Commissioners in Lunacy (精神病院監察官) の任に執き、45年から55年までは事務局長を務めた Robert Wilfred Skeffington Lutwidge (1802-73) は、写真草創期からのアマチュア・カメラマンであったが、キャロルにもその趣味の楽しさを教えた。

1855年の新年を叔父とリボンで過ごしていたキャロルは、彼から写真の手ほどきをうけ、9月初旬には叔父とともに写真撮影旅行に出かけ、その直後に写真のプロセスに目をみはる自分の心情を「驚異の写真術」(‘Photography Extraordinary’) という小文に仕上げ、雑誌「コミック・タイム」に寄稿している。写真術という科学発明の粋を文学に応用すれば、操作次第で感光紙に幾種もの文章がデヴェロップ(現像)できるのではないかと、また議会演説にも応用できるのではないかと、という文明批評論であった。

もう一人キャロルに写真の技法を伝授したのが、クライスト・チャーチ・カレッジの医学生友人レジナルド・サッジー (Reginald Southey, 1835-99) であった。彼はロンドンの医者之家に生まれ、叔父はテニソンの前の桂冠詩人 Robert Southey で、父親は医者で1828年から45年まで Medical Lunacy Commissioner を勤め、45年からは大法官任命の Medical Visitor in Lunacy を務めた。レジナルドは68年から83年までロンドンの Birkbeck Hospital の医者として、また83年から6年間は Commissioners in Lunacy の任務についた。

1855年3月キャロルは、クライスト・チャー

チ・カレッジのキャンパス内のブロード・ウオークを撮ったサウジーの写真をみて、カメラ・アングルが素晴らしい、と日記に書いている。写真をなかだちに行動をとにもすることが多かった二人は、ロバート・スケフィントン・ラトウィッジが、監査官としてオックスフォードや近郊の Lunatic Asylum を視察するようなどき、一緒にそこへ赴くこともあった。

1856年1月16日キャロルはロンドンで写真展を見て、サウジーと2日後写真を撮る約束をしたが、2日後の日記には、予定変更してサウジーといっしょにサリー精神病院(Surrey Lunatic Asylum)に、同病院の女性病棟の院長で、ロンドンの写真協会の会長でもあったダイヤモンド博士(Dr. Hugh Welch Diamond, 1809-86)をたずね、博士が撮ったロバート・スケフィントン・ラトウィッジ叔父の写真をもらったことなどが記されている。

ダイヤモンドは1848年 Surrey County Lunatic Asylum の女性病棟の院長として迎えられる、58年までその任にあった。ロンドンのベツレム(ベドラム)・ホスピタルで Sir George Tuthill 医師のもとで伝統的な厳しい治療法を学んだが、フランス精神医学界の長老 Philippe Pinel の流れをイギリスに取り入れたロンドン大学の医学部教授 John Conolly の「無拘束療法」という新しい療法に関心をいっていた。コノリーは1858年に、madhouse という呼び名はやめて、asylum に統一しよう、と提唱している(Trade, p.22)。このときキャロルがダイヤモンドに会って、どの程度 Lunatic Asylum を意識し、何を見学したかはわからないが、見学からしばらくたった2月9日の日記には夢と狂気についての次のような記述がある。

疑問：われわれが夢をみていて、夢と気付きながら目をさまそうとすると、目覚めているときなら狂っているとしか思えない

ことを言ったり、したりすることがないだろうか。

そうだとすると狂気を、夢と現実を区別できなくなった状態と定義しては間違いだろうか。非現実的だとは感じない夢をみることもある。

「眠りはもうひとつの世界」であり、現実と似た一面さえもっているようだ。

晩年の長編『シルヴィーとブルーノ』(正統)の場面設定についてキャロルは、夢と現実のあわいを eerie (妖氣的) な状態と位置づけ、もしそのような領域が存在するとしたら、われわれの感覚の世界はどうありうるかを物語にした、と序文で説明しているが、それにほぼ等しい概念を、1856年の段階ですでに抱いていたことを示している。60年代の終わりごろからキャロルは、「人生は夢にすぎないのか」という主題をつねに持ち続けるようになってゆく。

3月1日には友人が歩いていて発作で倒れたのをサウジーと介抱したが、自分の医学知識の不足を思い知り、翌日には医学書を注文している。

キャロルが身体医文化に関心を持つようになったのは、精神病院監察官の叔父の存在、そして医学生の友人サウジーの存在がとくに大きかったようだ。Surrey Lunatic Asylum のダイヤモンドも含めて、彼らは一様にアマチュア・カメラマンでもあった。

1856年3月18日に、キャロルはカメラを購入している。4月25日にはサウジーとクライスト・チャーチ・カレッジ学寮長のリデル家を訪問し、アリスを含む三人姉妹に初めて会っている。5月1日カメラが手元に届き、サウジーのおさがりの薬品で試し撮りをして失敗している。5月の日記には連日サウジーとともに写真を撮る日々がつづられている。

5月22日、ダイヤモンドはロイアル・ソサイエティーで“On the Application of

Photography to the Physiognomic and Mental Phenomena of Insanity”（「狂気の骨相と心のありように関する写真の応用」⁽⁵⁾）と題する講演を行った。彼は写真がこの50年で一挙に成熟の域に達したこと、狂気の研究もイギリスでさかんになってきていることを指摘し、形而上学者、哲学者、道徳家、医者、生理学者らが心の病を治療するために、それぞれの分野から研究してきた狂気の問題に心惹かれている、と切り出している。そして写真は、body & mind を統合して捉えることの出来るものである、と説いた。

この講演のことはキャロルの日記に記述はないが、時をおかず、叔父やサウジーなどとの会話に上ったであろうことは間違いない。

これらの写真は、1852年ロンドンで“Types of Insanity”と題して展示され、また56年にはパリの写真家協会主催でクリミヤ戦争終結記念行事の一環として展示された。キャロルは56年3月26日の日記に、リボンで展示されていた「クリミヤ戦争写真展」をみたことを記している。これは写真家で英国写真協会の会長にもなったロジャー・フェントン（Roger Fenton, 1819-69）が、55年3月から6月までクリミヤで撮った350点の写真の展示会で、55年ロンドンを皮切りに巡回していた。

ダイヤモンドは1848年 Surrey Lunatic Asylum に赴任して以来、写真を臨床医学に応用する試みを研究していた。講演で彼はその効用を三つあげている。第一は外観（容貌）の記録ができること、第二に正確なセルフ・イメージを治療に用いることができること、第三に患者の様子を記録し、再入院時に変化の確認がスムーズにできること、などである。写真をみれば、写真が症状を雄弁に語りだす、ともいっている。

貧しい夫婦に子どもが生まれ、夫はオーストラリアに働きにゆき、残された妻が精神錯乱を起こした mania（躁病）患者の4枚の写真が、症状の4つの段階をあらわしているの

を具体的に示して次のように解説した。

- 1) 入院初期は髪の毛が逆立ち、眉間のしわ、目つきの落ち着かなさ、苦しそうな息遣い、ゆがんだ口もとが目立つ。
- 2) なだめられない状態ではなくなり、興奮が収まる段階。笑いはあるが陰しい笑いで髪の毛は逆立っている。
- 3) 表情は静かになり狂った笑いではなく、すこし悲しみを含んだ笑いになり、髪は自然に流れるようになる。額だけに心の乱れた様子が残る。
- 4) 落ち着いて mania はすっかりよくなり、正常な精神状態になり、1, 2, 3, をくぐってきたことが考えられない。⁽⁶⁾

女性病棟のダイヤモンドの前任の院長であった Sir Alexander Morison は、骨相に注目したフランスのエスキール（Jean-Etienne Dominique Esquirol）の薫陶をうけ、患者の表情を画家に描かせていた。ヘレン・スモールは *Love's Madness* のなかにモリスンの *Lectures on Insanity* (1856) の絵を再録している。⁽⁷⁾

楽しい話としてダイヤモンドは、1854年の夏に経験した20歳の虚言症の女性のケースを紹介した。彼女はロンドンのベツレム・ホスピタルに1年いたが、治癒しないままサリーに移されダイヤモンドの担当になっていた。

彼がある日、患者たちに女王（queens）になったつもりで写真のモデルになってもらおうといったところ、彼女は「女王たちだって！ どうやって彼女たちがその肩書きを手にいれたのか」というので、「ただ想像するだけだ」と言うので、「そんなばかげた錯覚など出来るはずがない、彼女たちがあわれだ。わたしだけがクイーンとして生まれたのだから」と主張したという。その後、この話を繰り返しもちだすうちに、次第に彼女の妄想は弱まり、やがてすっかりよくなって退院した。あとになって彼女はその話を心から笑えるようになった、と話した。ここで自分の古い写真をみることで自分を客観化できるようになったとい

うのは、さきにダイヤモンドがあげた第二番目の効用であるセルフ・イメージの確認にあたるのであう。

このエピソードは、たとえトランプだろうが、チェスだろうが、複数の女王の存在を嫌う『不思議の国のアリス』や『鏡の国のアリス』に登場する女王の姿を髣髴とさせるところではないだろうか。ゴーゴリの『狂人日記』の、王様だと思ひこむヒーロー、武田泰淳の『富士』の、宮様だと思ひこむ人物なども同類である。

美術史上、人間の感情をもっとも的確に表現した画家は、アルブレヒト・デューラーだといわれている。とりわけ有名なのが「メレンコリア」(1514)である。ルネッサンス以降もっともなぞの多い絵とされ、多くの芸術家にインスピレーションをあたえた傑作であるが、医学と直接結びつけたものではなかった。

肖像画の伝統の中に、医者が精神をわずらう患者を友人の画家に描かせた例がある。フランスの精神科医ジョルジュ (Dr. Etienne-Jean Georget) はピネルとエスキルの薫陶のもとで新しい精神医学を学び、初めて絵画と精神医学を結びつけたといわれている。彼は1802年 mental illness を含む病気をわずらう人々 [madnes, melancholy, faturity (痴呆), consumption (肺結核), dropsy (水腫), jaundice (おうだん), leprosy (ハンセン病), gutta rosea (紅斑症), stone (結石), cancer (癌), colic (疝痛), dysentery (赤痢), smallpox (天然痘), measles (はしか), scarlet fever (しょう紅熱), その他の疫病など] を描いた絵を一堂に集めたギャラリーを構想した。

1825年アレグザンダー・モリスンは *Outline of Lectures on Mental Diseases* を出版し、顔の様相と精神疾患を図版入りで示し、つづいて1834年には *The Physiognomy of Mental Diseases* を出した。このような流れが

展開されていたなかで、ダイヤモンドは1852年「狂気のタイプ」(Types of Insanity) という一連の写真をロンドンで一般公開した。この年はロイヤル・アカデミーで画家アーサー・ヒューズと J.E. ミレーがそれぞれ「オフィーリア」を出展した年でもあった。ダイヤモンドは精神疾患の患者の写真を撮った英国でのパイオニアである。さらに写真技術の開発、簡便化にも心血をそそぎ、印画紙の改良など、写真複製の方法の改善にも尽した。59年から69年まで写真協会の雑誌編集にもかかわるなど写真界の発展に精力的にかかわった。

1858年にコノリーはダイヤモンドの写真を活用して“Case Studies from the Physiognomy of Insanity”を医学誌に発表している。コノリーはディッケンズやジョン・フォスター (Commissioners in Lunacy で、伝記作家、編集者でもあった) とも親しかったが、1863年『ハムレット論』(*Study of Hamlet*) のなかで、精神障害の患者たちは習慣的な礼儀正しさと、部分的な無礼さが混在しているものだが、舞台女優の優雅なオフィーリアたちは、ヴィクトリア朝の Lunatic Asylum の女性患者に少しも似ていない、よい舞台女優ならありのままの症例を熟視する気構えがあつてしかるべきであろう、と苦言を呈した。この挑戦をうけて画期的なオフィーリアを演じたエレン・テリーは、精神病院を訪れたが「彼女たちのほうが芝居がかつており学ぶべきことは何もなかった」と1908年『自伝』で述べた。⁽⁸⁾

写真を狂気の治療に用いることの欠点もあげられている。いわゆる「やらせ」である。ポーズをとらせることや顔を重視すること、背景がないことなど、芸術写真的効果をねらいすぎている、との批判もあった。それ以前狂気を描写した姿には、ホガースの「放蕩者一代記」に教訓がこめられていたようにモラルがもりこまれていた。

1856年、つまりダイヤモンドがこの講演を行った年の Surrey Lunatic Asylum の年間報告

書 (Annual Report) は全体が57ページに及ぶ膨大なものである。それによると、収容患者数は年はじめに1180名であったが、完治して退院したものの男61名、女37名、治癒半ばで退院したものの男19名、女12名、他の施設に転院したものの男女ともに9名ずつ、死亡者数は男75名、女36名で、現在男407名、女515名、計922名の患者がいると報告し、56年に Asylum 内で起きた特記すべき一件を報告している。

1856年4月9日入院していた患者の一人 Daniel Dolley が冷水浴と催吐剤による治療中に突然死した。死因は持病の心臓疾患とされたが、その死に不審な点があると考えた地方査察委員会 (Committee of Visitors) が詳しい取調べを要求した。裁判が開かれたが被告である病院の男性病棟の Medical Superintendent の Mr. Charles Snape がその時点で休職中であったことを考慮して Comm. Of Visitors は裁判の打ち止めを決めた。その報告書を見た Commissioners in Lunacy が再調査を Comm. of Visitors に依頼した。1856年4月19日の日付の書類の Secretary の名は R.W.S. Lutwidge の後任者の John Forster になっている。4月23日 Comm. of Visitors は Forster へてに返事を出し、それに対する声明書 (statements) を Comm. in Lunacy は Forster 名で12月13日付で送った (13-36)。それをうけて Comm. of Visitors の Clerk の S. Bridgland 名で57年2月6日に最終的見解を Comm. in Lunacy に返答した (36-55)、というのがあらましである。

すなわち、事件の顛末は患者、Daniel Dolly が死亡した時、病棟の責任者としてスネイブは、女性病棟の Medical Superintendent のダイアモンドも呼んで、当件について相談したうえで心臓の疾患による死亡と報告したが、実はその時点で、スネイブとダイアモンドの意見が食い違っていた。スネイブが心臓疾患が原因と断定したことにダイアモンドは不審をいだき、それを証明するため、息子の Mr. Warren Hastings Diamond の執刀で司法解剖を

行い、心臓を取り出して調べた。その結果心臓の大動脈の半月弁に多少肥大が認められたが、突然死をするほどの欠陥はないことが明らかになり、死亡理由は28分もの冷水浴と大量の催吐剤の投与によるものと考えられる、という見解を示した。

二人の意見の食い違いを知った Comm. of Lunacy はあちこちの病院の医師に問い合わせ、実験を依頼したところ、専門家の多くは長すぎる冷水シャワーと大量の催吐剤という無茶な治療による死亡、との結論に達した。

Comm. in Lunacy を代表してフォスターは、治療前スネイブは、興奮した患者に殴られたため、懲罰を加えるために長時間の冷水浴を課したのではないか、常識として治療のための冷水浴は6分で十分であることなどの回答を Comm. of Visitor に送った。

それを受けて56年9月スネイブの裁判が行われたが、先に述べたように途中で打ち切られていた。Comm. in Lunacy は裁判のやり直しを要求した。陪審員は判決でスネイブのおこなったふるまいは、彼の職をうばうほどのエラーではない。したがってスネイブは、男性病棟の院長職は剥奪されるが、仕事に復帰すべきであるとした。Comm. in Lunacy はこの決定は少し危険、と危惧をにおわせつつその手紙はおわっている。Comm. of Visitor が57年2月6日に出した最終の手紙の内容は次のようである。

自分たちの否を認める。冷水浴につれていかれたとき、入るようについたらおとなしく従ったそうだから、もう患者の興奮も収まっていたに違いない。殴られていなければ、スネイブはあんな無茶な治療はしなかっただろう。罰として行う治療法も場合により認められているのだから、刑事裁判でスネイブははつきりそのことを言うべきだった。検死も不適切だった。完全な検死が行われていれば正確な死因が判明したはずである。スネイブのこれまでの仕事ぶりから言えば、あの決定は正

続であると考え。

ダイヤモンドに関しては、シャワーバスと葉の大量投与について、証人として裁判で証言すべきであった。女性病棟のダイヤモンドが男性病棟患者の心臓を見たいというのは、職権外のことである。個人的に死体から心臓を取り出しあとで Asylum の診療所で焼き捨てたのもよくない。そのことを知らずに(心臓なしで)患者は埋葬されたことになる。なぜそんなことをしたのか問われなければならない。ダイヤモンドの息子の執刀に関しては、病院管理者の了解無しに死体から心臓を取り出したのもよくない。

Comm. of Visiter にも非があったことを認める。事件があったらケースブックに記入しなければならない、ということは今後もっと徹底させるべきである。

このように1856年の年間報告書は、Asylum と Comm. of Visiter と Comm. in Lunacy が病院、地方自治体、国の三つ巴の力の構図に縛られ苦悩する様子が伝わってくるようなものであった。

ダイヤモンドは1858年 Surrey Lunatic Asylum を辞し、ミドルセックスに private asylum を開き86年6月21日に亡くなるまで仕事を続けたが、Surrey をやめてからは患者の写真を撮らなかつた。

1857年キャロルはサウジーと多くの意欲的な写真を撮っている。5月26日にはア克蘭ドにアナトミー・スクールにあるツナ・フィッシュのスケルトンを見せてもらい、写真を撮ってほしいと頼まれる。ア克蘭ドはキリンの骸骨をクライスト・チャーチ・カレッジの馬小屋に持っていた。しかし聖堂賛事会員の犬に尻尾の骨を齧^{かじ}られたので、1847年からミュージアムの必要を訴えて、ラスキンとともに University Museum の創設にかかわり、みずから建物のデザインを手がけた。

この時期キャロルは解剖図の写真をたくさん撮った。サウジーとヒトとサル^{ヒト}の骸骨を並

べた写真、キウイ鳥、ツナ・フィッシュ(横からと前から)、たらの頭部と骨、サンフィッシュ、ありくい、などである。

12月19日の日記には、ロンドンのバーソロミュー病院にサウジーをたずね、手術を見学したことが書かれている。

膝の関節にできた腫瘍の手術だった。名医ローレンスの執刀でクロロホルムの助けをかりて行われた。クロロホルムで最初は痙攣がおきたが、効いてくると泥酔状態のようになった。3インチほどの病変した骨を切断した。全部で一時間かかった。途中で気分が悪くなるかと思ったが最後まで見続けられたのには驚いた。痛みで苦しきそうだが患者はまったく感じていないようだった。

翌日は写真協会展に出品する写真をサウジーにあずけている。そのなかにはアグネス・ウエルドの「あかぎん」も含まれていた。1858年にはアリス・リデルの「こじきの少女」を撮っている。

1863年6月21日友人の Bayne とヘディントンの Lunatic Asylum に行っている。ここは43年以降 Warneford Hospital になっていたところであるが、日記には Bayne の叔父が Superintendent をしており、Bayne の母親が入院していると記している。この直後6月27日から12月19日までの175日間、リデル家とキャロルの間に何らかの理由による断絶があった。日記のオリジナル原稿を見ると、字の乱れが著しく、心の動揺をにおわせている。

1864年12月21日、キャロルはロンドンの衛生局に Tom Taylor をたずね、画家テニエルへの紹介状をたのんでいる。

1865年2月19日には、Littlemore Asylum に Superintendent の William Ley をたずねている。レイは46年から68年まで院長をしていた。53年には回復期の患者に作業療法を取り入れて

いる。67年の患者数は510名である。給料の最高額はレイの年450ポンド、最低額は台所メイドの年10ポンドであった。

レイは患者が楽に過ごせるよう、必要に応じて患者を分ける方法を取り入れ、犯罪者を収容しないことを決めた。看護師は患者に親切な態度で接するようにし、宗教的雰囲気を取り入れるよう力を入れた。

キャロルが訪れた1865年の Annual Report をみると、汚水溜めの改善要望が添えられている。

65年3月8日にキャロルは、テニエルから『不思議の国のアリス』に付け加えられた6章、7章の挿絵に関して、両者が狂気の登場人物に注いだ熱意が伝わるような、細かな問い合わせの手紙を受け取っている。その手紙はポドリエン・ライブラリーで見ることが出来る。

5. キャロルの作品を読み直す

以上のような1850年代、60年代のキャロルの身体医文化への関心をふまえたうえで、ノンセンス、夢、眠り、狂気をキーワードにしながら『不思議の国のアリス』三部作、すなわち

- (1) *Alice's Adventures under Ground*,
- (2) *Alice's Adventures in Wonderland*,
- (3) *The Nursery "Alice"*

を読んでみる。(以下、章、ページ、引用部分。アンダーラインは筆者による目安箇所)

(1) *Alice's Adventures under Ground* (1862~4)
テキストはオリジナルの復刻版(1979)による。最初から一貫して夢をみていることが前提になっている。

- Chap. 1
- 1 sleepy
 - 4 sleepy / say to herself in a dreamy sort of way
 - 5 just began to dream
 - 14 Who am I?

- Chap. 4
- 78 Queen の行状を Gryphon が, "Why it's all her fancy" という。
 - 83 The two creatures, who had been jumping about like mad things all this time, sat down again very sadly and quietly, and looked at Alice.
 - 89 "I've had such a curious dream!" / among them was another little Alice, who sat listening with bright eager eyes to a tale that was being told, and she listened for the words of the tale, and lo! it was the dream of her own sister.

と、物語は、アリスの夢物語を聞いたお姉さんが、アリスのゆくすえを夢見るように想像しつつ終わっている。

(2) *Alice's Adventures in Wonderland* (1865),
テキストは Oxford World's Classics, 1971
による。

- Chap. 1 Down the Rabbit-Hole
- 9 Alice was beginning to get very tired of sitting by her sister on the bank.
 - 9 A White Rabbit say to itself 'I shall be too late!'
(時間をしきりに気にする白うさぎ)
 - 13 'Drink me'
 - 14 'What a curious feeling!'
 - 15 'Eat me'
- Chap. 2 The Pool of Tears
- 15 Curiouser and curiouser!
(ことばくずし、造語は『鏡の国』でより顕著に)
 - 18 I wonder if I've been changed in the night?
 - 19 The words did not come the same as they used to do. Alice's eyes filled with tears.
 - 22 Angry Mouse
- Chap. 3 A Caucus-Race and a Long Tale

- 26 Caucus-race by Dodo (レースの
ルールはずし)
- 28 long tale (tail) (ことば遊び)
- Chap. 4 The Rabbit Sends in a Little Bill
- 33 Now here I am in the middle of a
fairy tale.
- 34 'Digging for apples. (mad gardener
のように。庭師のでるところは
いつも mad の空気濃厚)
- 36 'Catch him, hold up his head –
Brandy now – Don't choke him.
(失神の応急手当)
- Chap. 5 Advice from a Caterpillar
- 40 'Who are you?' said the Caterpillar.
Alice replied rather shyly, 'I – I
hardly know, Sir, just at present.
- 41 'What do you mean by that? Explain
yourself!'
'I ca'n't explain myself, I'm afraid,
Sir, because I'm not myself! You
see.'
'Come back! I have something
important to say! Keep your temper.'
- 46 'One side (of the mashroom) will
make you grow taller, and the other
side will make you grow shorter.'
- あたかも医者(い)が患者(に)が薬(を)を処方(する)するように、
いもむしがアリスに忠告(する)する。
- 'And now which is which?' she said
to herself, and nibbled a little of the
right-hand bit to try the effect. The
next moment she felt a violent blow
underneath her chin: it had struck
her foot! so she set to work at
once to eat some of the other bit.....
all she could see, when she looked
down, was an immense length of
neck.....
- 47 'Serpent!' screamed the Pigeon.
- 48 'But I'm not a serpent....I-- I'm a

little girl.' Said Alice. The Pigeon
added 'You are looking for eggs, I
know that well enough; and what
does it matter to me whether you're
a little girl or a serpent?'

After a while she remembered that
she still held the pieces of
mushroom in her handsnibbling
first at one and then at the other,
until she had succeeded in bringing
herself down to her usual height.

大きさの調節が自由に出来るようになるアリス。

Chap. 6 Pig and Pepper

50 A footman (like a fish) in livery
came running out of the wood - and
rapped loudly at the door with his
knuckles. It was opened by another
footman (like a frog) in livery.

51 The Fish-Footman began by
producing from under his arm a
great letter and handed over to the
other, saying, 'For the Duchess. An
invitation from the Queen to play
croquet.' (許可証のように)
Alice went timidly up to the door,
and knocked.

'There's no sort of use in knocking,
because I'm on the same side of the
door as you are, and because they're
making such a noise inside, no one
could possibly hear you.' Said the
Footman.

'Please, then, how am I to get in?'
said Alice.

52-3 'How am I to get in?' asked Alice
again.

'Are you to get in at all? That's the
first question, you know.' Said the
Footman. 'But what am I to do?' said

Alice. 'Anything you like.' said the Footman. 'Oh, there's no use in talking to him, he's perfectly idiotic!' said Alice desperately.

The door led right into the kitchen, which was full of smoke one to end to the other: the Duchess was sitting on a three-legged stool in the middle, nursing a baby: the cook was leaning over the fire, stirring a large cauldron which seemed to be full of soup.....and a large cat, which was lying on the hearth and grinning from ear to ear.

57-8 'Cheshire-Puss, Would you tell me, please, which way I ought to go from here?'

'That depends a good deal on where you want to get to,' said the Cat. 'I don't much care where — ' said Alice. 'Then it doesn't matter which way you go,' said the Cat. '— so long as I get somewhere,' Alice added as an explanation.

'What sort of people live about here?' asked Alice.

'In that direction,' the Cat said, waving its right paw round, 'lives a Hatter: and in that direction,' waving the other paw, 'lives a March Hare. Visit either you like: they're both mad.' (Lunatic Asylum を示唆)

'But I don't want to go among mad people,' Alice remarked.

'Oh, you ca'n't help that,' said the Cat: 'we're all mad here. I'm mad. You're mad.'

'How do you know I'm mad?' said Alice.

'You must be, or you wouldn't have

come here.'

'I wish you wouldn't keep appearing and vanishing so suddenly: you make one quite giddy!' said Alice. 'All right,' said the Cat; and this time it vanished quite slowly, beginning with the end of the tail, and ending with the grin, which remained some time after the rest of it had gone. 'Well! I've often seen a cat without grin, but a grin without a cat! It's the most curious thing I ever saw in all my life!'

Chap. 7 Mad Tea-Party

帽子屋は時間を失って、狂気の化身として登場しているので帽子屋の視点で読むとよい。三月うさぎはさかりがつく時期。ねむりねずみは文字どおり眠ったまま。カルテを読むように mad の三様 を示している。

60 Your hair wants cutting,' said the Hatter. 'You should learn not to make personal remarks, it's very rude.' Alice said with some severity. The Hatter said 'Why is a raven like a writing-desk?'

61 'I believe I can guess that,' she added aloud.

'Do you mean that you think you can find out the answer to it?' said the March Hare. 'Exactly so.' Said Alice. 'Then you should say what you mean.' the March Hare went on. 'I do, at least I mean that I say — that was same thing.' said Alice. 'Not the same thing a bit!' said the Hatter. 'Why, you might just as well say that " I see what I eat" is the same thing as " I eat what I see"!' You might just as well say that "I like what I get" is the same

thing as "I get what I like"!
62 'What day of the month is it?' the Hatter said, turning to Alice.

Alice said 'The fourth.' 'Two days wrong!' 'What a funny watch!' she remarked. 'It tells the day of the month, and doesn't tell what o'clock it is!' 'Why should it? Does your watch tell you what year it is?' muttered the Hatter. 'Of course not, but that's because it stays the same year for such a long time together.' replied Alice. 'Which is just the case with mine.' said the Hatter.

63 'I think you might do something better with the time, she said, 'than wasting it in asking riddles that have no answers.'

'If you knew Time as well as I do,' said the Hatter, 'You wouldn't talk about wasting it. It's him.' 'I don't know what you mean.' said Alice. 'but I know I have to beat time when I learn music.' 'He wo'n't stand beating. If you only kept on good terms with him, he'd do almost anything you liked with the clock.' said the Hatter.

63 'Is that the way you manage?' Alice asked. 'Not I! We quarreled last March, it was at the great concert given by the Queen of Hearts, and I had to sing; "Twinkle, twinkle, little bat! How I wonder what you're at!"' 'Well, I'd hardly finished the first verse, when the Queen bawled out "He's murdering the time! Off with his head!"' 'And ever since that, he wo'n't do a thing I ask! It always six o'clock now.'

64 'Once upon a time there were three little sisters..... and they lived at the bottom of a well — 'They were learning to draw, drew all manner of things; everything that begins with an M — '

67 'Why with an M?' said Alice.

'Why not?' said the March Hare. '— that begins with an M, such as mouse-traps, and the moon, and memory, and muchness — you know you say things are "much of a muchness"— did you ever see such a thing as a drawing of a muchness!'

'I don't think —' 'Then you shouldn't talk!'

Chap. 8 The Queen's Croquet-Ground

69 The large rose-tree stood near the entrance of the garden: there were three gardeners at it, busily painting them red.

庭師の登場するところではつねにmadnessと結びつく。

76-7 When she got back to the Cheshire-Cat, she was surprised to find quite a large crowd collected round it: there was a dispute going on between the executioner, the King, and the Queen.

The executioner's argument was, that you couldn't cut off a head unless there was a body to cut it off from. The King's argument was that anything that had a head could be beheaded.

The Queen's argument was that, if something wasn't done about it in less than no time, she'd have everybody executed, all round.

Alice could think of nothing else to

say but ' It belongs to the Duchess:
you'd better ask her about it.'

Chap. 9 The Mock Turtle's Story

公爵夫人とアリスの格言ごっこ。教訓めいたものではなく「ことばあそび」である。

80 Take care of the sense (pence), and
the sounds (pounds) will take care
of themselves.

82 The Queen said to Alice 'Have you
seen the Mock Turtle yet?' 'No,' said
Alice. 'It's the thing Mock Turtle
Soup is made from,' said the Queen.
'Come on, then, and he shall tell you
his history.'

この history はカルテともとれることばである。

83 The Gryphon sat up and rubbed its
eyes: then it watched the Queen till
she was out of sight: 'What fun! said
the Gryphon, it's all her fancy: they
never executes nobody, you know.'

84 The regular course of the school in
the sea (学校批判)

reading = reeling

writing = writhing

addition = ambition

subtraction = distraction

multiplication = uglification

division = derision

history = mystery

geography = seaography

drawing = drawing

painting in oil = fainting in coil

sketching = stretching

Latin = laughing

Greek = grief

Ten hours the first day, nine the
next, and so on.' Said the Mock
Turtle. 'That's the reason they're
called lessons,' the Gryphon

remarked: 'because they lessen from
day to day.'

Chap. 10 The Lobster-Quadrille

モックタートルはことばあそびとダンスでは
躁, スープの歌をうたうときは鬱状態になる。

95 The Mock Turtle sighed deeply, and
began, in a voice choked with sobs,
to sing; 'Beautiful Soup, so rich and
green, ...' More faintly came the
melancholy words: 'Soo---oop of the
e---e---evening, ...'

Chap. 11 Who Stole the Tarts?

98 The Queen of Hearts, she made
some tarts, / All on a summer day:/
The Knave of Hearts, he stole those
tarts / And took them quite away!

という伝承童話にちなむ裁判。

Twelve jurors

The first witness was the Hatter.

The second witness was the
Duchess's cook.

The third witness was Alice who
grow large.

Chap. 12 Alice's Evidence

108 'No,no!' said the Queen. 'Sentence
first — verdict afterwards.'

'Stuff and nonsense!' said Alice
loudly. 'The idea of having the
sentence first!' 'Hold your tongue!'
said the Queen, turning purple.

'Who cares for you?' said Alice,
'You're nothing but a pack of cards!'

110 'Wake up, Alice dear!' said her
sister. 'Why, what a long sleep
you've had!' 'Oh, I've had such a
curious dream!' said Alice.

(3) *The Nursery "Alice"* (1889)

テキストは1890年 second (First Published)
Editionによる。

Chap 1.

- 1 Once upon a time, there was a little girl called Alice: and she had a very curious dream. Would you like to hear what it was that she dreamed about?
- 3 If anybody really had such a fall as that, it would kill them: but you know it doesn't hurt a bit to fall in a dream, because all the time you think you're falling, you really are lying somewhere, safe and sound, and fast asleep! And so that was the beginning of Alice's curious dream. And, next time you see a White Rabbit, try and fancy you're going to have a curious dream, just like dear little Alice.

Chap. 14 The Shower of Cards

- 54 Oh dear, oh dear! What is it all about? And what's happening to Alice?Would you like to be punished for something you hadn't done?
- 56 So Alice said " Stuff and nonsense! You're nothing but a pack of cards!" So they were all very angry, and flew up into the air, and came tumbling down again, all over Alice, just like a shower of rain.
Wouldn't it be a nice thing to have a curious dream, just like Alice?

The Nursery "Alice" の最初の着想はキャロルの日記によれば、1881年2月なかばにマクミラン社に相談している。85年3月にはテニエルが色づけ中であることが書かれ、全体を14章、長さは4分の1、わかりにくいことばあそびや詩は省く、という製作意図が記されている。テニエルはこの版でアリスの姿を一部手直した。

しかし文章は説明が多く作者が前面に出ず

ぎている感がある。印刷技術が進歩し、カラー絵本が主流になってきた当時、『不思議の国のアリス』の絵本出版に託したキャロルの意図は、夢をみているアリスを描いた、ガートルード・トムソンの表紙絵にあますところなく結実している。

6. 結

小さな疑問、「『不思議の国のアリス』のなかで出版のために書き加えられた二つの章になぜ狂気の影が色濃く反映されているか」にはじまった目下の研究テーマを考えるために、キャロルの個人史でもっとも目を見張る転換期である1855年から65年までを重点的に調べてみた。そして彼がとくに強い関心を持っていた写真と身体医文化を二本の柱にして、医学 / 精神医学の転換期、科学 / 写真の進歩に光をあてながら、キャロルの作品を新歴史学の視点で読むことを試みた結果、

		身体医文化		
		Acland Conolly Diamond Forster Ley Lutwidge Southey Wilkes		
写 真	Diamond Southey Lutwidge	Carroll	novelists poets painter artists	芸 術 家
		Alice girls		
		少 女		

このようにキャロルを中心においた人間曼荼羅の構図がなりたつ。キャロルの作品はこういった時代背景、人間交流の中心からのキャ

ロルの発露にほかならない。キャロルの長年のテーマであった「人生は夢」の命題も、かれの作品も、身体医文化と写真の二本柱の交差する中心点からの、キャロルの自己統合の発露であると考えれば、狂気/正気や、夢/現実、の問題もそれぞれ単独の意味は浅いものとなるだろう。

Asylum ということばが本来持っている「不可侵性」という意味を考えるならば、『鏡の国のアリス』で Humpty Dumpty が使っている 'Impenetrability' がここでも想起されるが) 第6章で魚の門番のいるドアからアリスを中に入れ、アリスに託して、児童文学ではタブーとされていた狂気のテーマを、あえてそのジャンルを借りて開拓していったキャロルのノンセンス文学の意図が、時代を映す鏡のように明瞭に浮かび上ってくる。

[注]

- (1) 'Puritans and Poor Relief The London Workhouse, 1649-1660' by Valerie Pearl, Puritans and Revolutionaries, *Essays in Seventeenth-Century History presented to Christopher Hill*, ed by Donald Pennington and Keith Thomas, Oxford, 1978, p.211.
- (2) 石塚, 鈴木編, 『身体医文化論』, 慶応義塾大学出版会, 2002, p.19-20.
- (3) ポーター, ロイ, 目羅公和訳『狂気の社会史』, 法政大学出版局, 1993, p.85
- (4) Atlay, J.B., *Sir Henry Wentworth Acland, Bart.*, London, 1903. p.4.
- (5) Sander L. Gilman (ed.), *The Face of Madness: Hugh W. Diamond and the Origin of Psychiatric Photography*, New York, 1976, pp.17-24.
- (6) *ibid.*, p.21, p.61.
- (7) Small, Helen., *Love's Madness*, Oxford, 1996, p.64-7.
- (8) 青山, 川地編, 『シェイクスピア批評の現在』, 研究社出版, 1993, p.96.
- (9) Hogarth, William., A Rake's Progress, Plate VIII, in *Engravings by Hogarth*, ed. by Sean Shesgreen, N.Y., 1973.

[参考文献]

- ポーター, ロイ, 目羅公和訳『イングランド18世紀の社会』, 法政大学出版局, 1996.
- Porter, Roy. *The Greatest Benefit to Mankind*, Fontana Press, 1997.
- Porter, Roy. *Madness, A Brief History*, Oxford, 2002.
- Parry-Jones, William Ll. *The Trade in Lunacy*, Routledge & Kegan Paul, 1973.
- Surrey Lunatic Asylum's Annual Report.*
- Littlemore Asylum's Annual Report.*
- Oxfordshire Local History.*

[Abstract]

A History of Madness in 19th-Century England: Lewis Carroll's Body & Mind Concerns

Kumiko TAIRA

The theme of this paper started from my simple question, 'Why do the added parts for publication of *Alice's Adventures in Wonderland* contain mad situations so clearly?' For the consideration of this theme, I chose one decade 1855 - 1865 from Carroll's personal history which seemed to be his biggest turning point. During this period he had two main interests, photography and concerns about body & mind, and the most important key-persons for him were Robert Wilfred Skeffington Lutwidge, his maternal uncle and a Commissioner in Lunacy as a barrister, and Reginald Southey, a medical student in Christ Church College with whom he shared those two interests. Also, we can find many medical persons among the entries of Carroll's diaries of those days. In this paper I try to combine the decade with the big turning point in medical history, and re-read Carroll's works from a new- historical point of view.

Key words : Madness, Lunatic Asylum, Medical Photography